

福嶋氏の相棒ブーツ拝見



写真はホープスマアの福嶋氏が約7年間履き込んだ95年製2268、PT91・プリントタグである。福嶋氏が日常的に履き込んでおり、オールソール交換のほか、中底交換、腰裏交換、バックステー三角ステッチと言ったカスタムが施されている。



リウエルト&ダブルステッチ、フロントダブルミッドソール化。ソールはピラミッド705ブラウンに交換し、ブラウン仕上げを施している。



バックステーのステッチを二重にし、さらに三角ステッチを追加することで強度を高めている。

これが元のモデルだ

95年製の2268、PT91のプリントタグ。このモデルもガンガン履き込んで行けば福嶋氏のブーツのような迫力ある姿になるはずだ。サイズは9Dで4万9800円。



通常モデルと比較すれば
その差は歴然



RED WING / 2268
4万9800円(サイズ:8D)

右ページで紹介している茶色い銀面モデルとの比較用として、1997年製のPT91を用意した。より公平性を保つために、こちらもあまり履き込まれていない同一コンディションのブーツをチョイス。



比較モデル

写真右側が茶色い銀面のモデル。左が通常の2268。並べて比較してみると、茶色い銀面と呼ばれるモデルがいかに茶色いかがお分かりいただけるだろう。つま先からヴァンプ、シャフトに至るまで全体的に茶色掛かった色味になっている。写真では見づらいが、革の断面部分も茶色い銀面では茶色、通常モデルではグレーっぽい色をしていることが確認できる。



タグはプリントから刺繍タグへと変更されているが「PT91」の文字は健在。この写真かえを見るとシャフト内側の革裏側がブラックになっていることが分かる。右ページの茶色い銀面モデルでは茶色くなっていたが……。



近くに寄って見るとその差が顕著に分かる。まったく革が擦れていないヴァンプ部分での比較だが、左の通常モデルはブラックで右の茶色い銀面は茶色く輝く。これは何かしらのイレギュラーによって誕生したレアモデルなのではないか?という仮説が浮かぶ。

茶色く底光りするレアモデル解明への探求…

2268を紐解く



ホープスマアの福嶋紀彦氏。日本で一番ヴィンテージのレッド・ウィングを見てきた男と言っておかしくないだろう。茶色い銀面モデルの存在に関しては慎重な姿勢を見せていたが、プロスの誌面のために個人的見解を話してくれた。

数多く存在するレッド・ウィングのなかでも、漆黒の2268エンジニアブーツは別格と言えるほど人気が高く、ヴィンテージブーツ専門店のホープスマアでも主力モデルとなっている。その2268のなかで極稀にブラウンに輝くブラックレザーのモデルが確認されている。ネットでは「茶芯」と呼ばれているこのモデルに関して、ホープスマアの福嶋氏が自らの見解を話してくれた。

RED WING / 2268

参考商品

1994年製のPT91モデル。写真を見ればお分かりの通り、あまり履き込まれていないにも関わらず、表面は薄っすらと茶色に輝いている。茶芯と言われるように芯が茶色いのであれば、履き込んで表面が擦れないと茶色は出てこない。福嶋氏が茶色い銀面モデルの存在を気にする由縁である。



この茶色い輝きの謎に迫る!



革の裏側まで茶色くなっていることも茶色い銀面モデルの特徴だ。通常のモデルではもっと黒いになっている。謎は深まるばかりだ。



シャフトの内側に「RED WING」の文字が刻印されているのも特徴。このディテールの有無で「刻印アリ」「刻印ナシ」と差別化される。



プリントで表現されたタグに記された「PT91」の文字。PT91と呼ばれるモデルでも、年代によっては刺繍タグのモデルも存在する。



つま先やヴァンプ部分を見れば、銀面が茶色いことがお分かりいただけるだろう。特につま先部分はほとんど履き込まれておらず、革が擦れた形跡もないのに茶色い。つまり銀面(=革の表面)自体が茶色いことの証である。



ブーツ磨きには
日本手拭いが役に立つ!

ホープスマアの福嶋氏も、お客さんに教えられ試してみたらあまりの効果に驚いたというメンテナンス法だ。特にオイルを付けることもなく、ただ日本手拭いでゴシゴシと磨き込む。するとみるうちにピカピカの光沢が蘇ってくるのだ。ぜひとも実践してみたい。



向かって左側が日本手拭いで磨いたブーツ。その光沢感の違いは歴然。ぜひとも自宅にある日本手拭いを出してきて、愛用のブーツを磨いてみて欲しい。



日本手拭いは非常に目が細かいので、ゴシゴシ磨いても糸くずがブーツに付着しない。特にオイルを付ける必要もなく、ひたすら磨くのみだ。



右は福嶋氏が履きこんだ2268で、左は同モデルの履き込まれていないモデル。履き込むということが、レッド・ウィングのブーツをもっとカッコよくする一番の近道であることを教えてくれる。

「あくまで僕の仮説であると言うことを断ったうえで説明しますね。表面が茶色くなっている2268のエンジニアブーツが存在することは確かです。僕が見てきた中では93・94年頃に多く見られます。これが巷では茶芯と呼ばれていることも事実です。でも、僕からしたら、これは茶芯ではなく銀面が茶色なんです。つまり茶色い銀面をもった革を指すんです。茶色い銀面モデルは最初から93・94年に多く見られると書きましたが、一説によるとこの年代だけ例年とは異なった納入業者から革を仕入れていたと言われています。その革が、茶色い銀面の材料だったのではないかと推測されます。

「僕もついつい言えることは通常のブラックの革と茶芯の革の顔料は酷似しているが、茶色い銀面の顔料はまったく異なります。以前、僕が海外で2268のエンジニアブーツを購入しようとしたときに、店員がツヤ有り、ツヤ無しを聞いてくるんです。同じブラックの2268ですよ。おそらく、通常のブラックと茶色い銀面のことを指していたのかも知れません。もちろん今となっては確認することでもできませんが……。繰り返しますが、明らかに茶色い銀面の個体は存在します。しかし、数多くのヴィンテージを見てきた僕自身も、また判別が難しくても、今後さらに調べる必要があります。ひょっとしたらいつの日か「茶銀」と呼ばれる日が来るかもしれませんね。まあそんな情報もレッド・ウィングの楽しみ方のひとつであり、僕のレッドウィング2268を解明する道程のひとつに過ぎないのです。なぜなら、レッドウィングのブーツは履き込むことが一番かっこいいことなんですから」